

19歳 剣術修行のため江戸に出る
28歳 勝海舟の弟子となる
31歳 貿易商社「亀山社中」を起こす
33歳 襲撃により落命

vol. 8

坂本 龍馬

▶▶▶ Sakamoto Ryoma

時代の流れを察知し 世界に目を向け駆け抜けた 熱き魂

長崎駅から徒歩25分、狭い路地の勾配のきつい石段を上ると日本初の貿易商社「亀山社中」の跡がある。すり鉢状の地形の中腹にあたるその地からは、多くの船が行き交う長崎港が一望できる。深い入り江の先に広がる海は、鎖国の時代も世界とつながっていた。幕末の混乱期、この海を眼下に世界を見据える1人の男がいた。

▶▶▶ 考え方を180度変えた師との出会い

坂本龍馬は江戸時代後期にあたる1835年、現在の高知県の下級武士の家に生まれた。5人きょうだいの末っ子の次男坊で、子どもの頃は泣き虫だったという。

長男以外の男子が出世の道を拓くには学問または武術で優れていなければならなかったが、龍馬は12歳で入った寺子屋に馴染めず、すぐにやめてしまう。そんな龍馬に武術を勧めたのは、3歳年上の姉だった。女性ながら剣術や乗馬が得意だった姉に鍛えられた龍馬は、14歳から道場に通い始め、腕を磨いた。

19歳になると、剣術修行のため江戸に上る。折しもアメリカから黒船が来航し国中が騒然としていた頃、藩からの命令で沿岸警備にあっていた龍馬の胸には、「異人から国を守らなければ」という思いが芽生えた。

その後、帰郷と剣術修行のための上京を繰り返しつつ、砲術や語学など学問にも力を入れた龍馬に転機が訪れたのは、28歳の時だった。藩を抜け浪人となった龍馬は、幕府で海軍を統括していた勝海舟に会いに行く。開国派の彼を倒そうと目論んでのことだったが、「外国に対抗する



1835年、土佐藩（現在の高知県）生まれの幕末の志士。日本初の貿易商社を起こすとともに、薩長同盟を実現し、大政奉還に影響を与えた船中八策を構想するなど、明治維新につながる活躍をした。

には、国を開いて外国の進んだ技術を採用し、軍備を整えるべき」という勝海舟の広い視野と新しい考えに強い衝撃を受け、弟子にしてもらえないかと頭を下げた。

▶▶▶ 道半ばにして、凶刃に倒れる

勝海舟が神戸に海軍の教育機関を設立するにあたっては、龍馬も奔走した。無事立ち上げられたのも束の間、幕府に混乱が生じるなか勝海舟が職を解かれ、閉鎖してしまう。だが、勝海舟の信頼を得て仕事を打ち込むうちに自らの目指す道を見出していた龍馬は、志を同じくする仲間たちを率いて、長崎で貿易商社「亀山社中」を立ち上げる。亀山社中は、船で物資を運び利益を得るだけでなく、西洋式の航海術を学ぶことも事業目的とした。その後、資金難に陥るものの、有力者から資金援助を受け再スタートを切る。「海援隊」と名を改め、従来の事業に加えて、出版や店舗運営など事業拡大をはかった。

龍馬は長崎から京都へ向かう船の中で、戦をせずに、幕府が朝廷に政権を返上し、新しい国づくりをするための構想を語っている。その構想からは、新しい時代の幕開けに胸を高鳴らせ、自らもその一助となろうとしていた様子がうかがえる。しかし、その思いは果たされぬままとなる。33歳の時、京都で襲撃され、道半ばにして命を落としたのだ。一度目の襲撃では、妻の必死の知らせにより奇跡的に負傷で済んだが、二度目の奇跡は起きなかった。龍馬が他界してひと月も待たぬうちに、長きにわたった武家による政治が幕を下ろした。

（執筆／ライター 篠田りょうこ）